森安孝夫編
ソグドからウイグルへ
――シルクロード東部の民族と文化の交流――

中田裕子

本書は、「シルクロード東部地域における貿易と文化交流の諸相」〔平成一七年～二〇年度科學研究費補助金、基盤研究（A）（一般）（以下、メンバーが用いてきた簡稱にならい「新シルクロード科研」とする）〕で得られた成果をまとめたものである。評者も二〇〇六年の調査に一部參加したものの、今回は執筆していないことから、書評を引き受けさせていただいた。

構成は、森安氏による序文、第1部：ソグド篇、第2部：ウイグル篇、第3部：行動記錄篇となっており、第1部、2部はこのシルクロード科研に參加した研究者たちが實際に現地に赴いて得られた成果をもとにした論文集であり、最後の第3部は、その調査時の詳細な行動記錄である。

本書の特徴は、新シルクロード科研による現地調査で様々な碑文などを實見した成果や景觀調査などより得られた結果を基に、各人がそれぞれ執筆している點にある。これは、第3部に特に詳細な行動記錄が附されていることからも、おわかりいただけるであろう。

本科研の調査は、その名の通り中央ユーラシアを通る「シルクロード・ネットワーク」を中心として、様々な角度からその歷史を明らかにすることを目的として行われたものである。

では、この「シルクロード・ネットワーク」とはいかなるものであろうか。

森安氏は序論の中で、この「シルクロード・ネットワーク」は東西をつなぐ線ではなく、東西南北に廣がるネットワークと述べている。これは、氏が二〇〇七年に上梓した著書（『シルクロードと唐帝國』、講談社、二〇〇七、以下、森安二〇〇七とする）でも、「シルクロードとは決して『線』ではなく『面』である」と指摘する（森安二〇〇七、六四頁）。

森安氏の考える「シルクロード・ネットワーク」は、「農牧接壤地帶（農業＝遊牧境界地域、農業遊牧交雜地域、半農半遊牧地帶）」をつらぬき、中國などの大農耕文明圈にいたるというが（本書、序文、七―八頁）、本書では、この「農牧接壤地帶」という概念が非常に重要視されている。ここで、あまり一般的でないであろう「農牧接壤地帶」という概念について若干の説明を加えたい。

この概念は、「農業のための可耕地と遊牧・放牧のための草原とが入り組み、どちらにも利用できる廣大な土地」であると森安氏は定義づける（本書、序文、七頁）。これは、森安二〇〇七でも指摘されており、氏の研究の中核をなす概念ともいえよう（森安二〇〇七、五九―六一頁）。つまり農牧接壤地帶では、半農半

牧の遊牧民と農耕民や都市民などの定住民が入り交って居住する地なのである。このような場所を「シルクロード・ネットワーク」は内包していた。

中華王朝というと、農耕地域をすぐさま想像するかもしれないが、中華王朝が支配した領域には、このような農耕と遊牧とともに可能な草原が大きく廣がる。たとえば、甘肅省、河北省北部、山西省北部などには、現在でも草原と可耕地の入り交じった地域が存在している。このような景觀は、新シルクロード科研の現地調査で確認されており、その詳細は第3部：行動記錄篇に記錄されている。ぜひ、參照されたい。森安氏はこのような「農牧接壤地帶」が「中國史のダイナミズムを生み出した中核部」（森安二〇〇七、六一頁）ととらえ、ユーラシア地域の現地調査をおこなうことにより、中華王朝とさらにそれをとりまく異民族が繰り廣げた東アジアにおける眞の歷史像を描き出そうと試みた。本書は森安氏のそのような歷史觀の集大成ともいえよう。

また、森安氏が述べる遊牧民と定住民の地を內包するという「シルクロード・ネットワーク」という概念、これはかつて間野英二氏が述べた「中央アジアにおける南と北」（『中央アジアの歷史：草原とオアシスの世界』、講談社現代新書、新書東洋史⑧、一九七七、以下、間野一九七七とする）という概念に通じるものであると、評者は考える。

間野氏は中央アジアには大きく分けて二つの世界、すなわち、北方には「草原地帶を中心とする遊牧文化」、南方には「オアシス定住地帶の農耕文化」が存在しており、この相異る生活樣式をもった兩者が、時には征服・被征服、支配・被支配の相互補完の共存關係にあったと指摘する（間野一九七七、一〇―一四頁）。

森安氏の指摘する「シルクロード・ネットワーク」も、間野氏の「中央アジアにおける南北」という概念も、遊牧民と定住民の對立した世界ととらえる點において、非常に近しいものであると評者は感じる。森安氏もその著作で、農牧接壤地帶に存在する萬里の長城が「農耕都市民と遊牧民がせめぎ合ってきた中國史の流れに應じて、この農牧接壤地帶を北上したり南下したりして、搖れ動いてきたのである」と述べている（森安二〇〇七、六一―六二頁）。

違いがあるとすれば、東西の動向に主眼をおくか、南北の關係に重きをおいて論を進めるかのどちらかである、というだけのことである。宇山智彦氏も兩者の相違に關して、「重點の置き方の違い」と述べている（『中央アジアの歷史と現在』、ユーラシア・ブックレット七、東洋書店、七頁）。

さらに近年、シルクロードの商人として高名なソグド人と遊牧民である突厥が混血していたことなどが明らかにされていく中で、もはや中央アジアの歷史を語る際に、東西・南北という二元論では語る事ができなくなっているのである。

よって今後、中央アジアの歷史研究では、それぞれの主とする時代・地域に應じてさまざまな議論が登場してくることになるのであろう。

このような狀況下において、個人レベルの論爭はもう必要ない。それぞれの主張や論理をこえた先に、新たな中央アジアの歷史像が生み出されることを評者は切に願う。

では以下に、本書のそれぞれの論考を、順次紹介していく。

第1部：ソグド篇

第1部は、まず森安孝夫氏「日本におけるシルクロード上のソグド人研究の回顧と近年の動向（増補版）」からはじまる。ここでは主に、ソグド人に關する研究史が紹介され、さらに近年の動向について森安氏の見解が述べられている。これは *Acta Asiatica*, No. 4, vol. 94, 2008/2, "Japanese Research on the History of the Sogdians on the Silk Road, Mainly from Sogdiana to China" の日本語版であるという。本書は、英語版が二〇〇六年までを對象としたのに對し、それ以降に出版された研究も加えられているために「増補版」とされる。明治末期から最近發表された新しい概念を取り込んだ研究までが網羅的に紹介されていると同時に、さらに森安氏による評價が附されている。今後、新たにソグド研究を目指す學生・初學者にとっては、非常に便利な「手引き書」となっているのではないだろうか。ただ殘念なのは、第1部においても次の第2部ウイグル篇においても、ウイグル研究の回顧と展望が附されていないことである。森安氏の專門分野でもあるウイグルに關する「回顧と近年の動向」は、ウイグル語・ウイグル史を學ぶ者の指標となることは間違いない。今後改めて公表されることを期待したい。

次に荒川正晴氏「唐代天山東部州府の典とソグド人」を收錄する。

荒川氏は、二〇〇六年にトルファンで發見された「龍朔二・三（六六二―六六三）年西州都督府案卷爲安稽哥邏祿部落事」と題される文書を檢討した。この文書は、すでに榮新江氏による詳細な檢討が存在する（榮新江「新出吐魯番文書に見える唐龍朔年間の哥邏祿部落破散問題」『内陸アジア言語の研究』二三、二〇〇八、一五一―一八五頁〔原載「新出吐魯番文書所見唐龍朔年間哥邏祿部落破散問題」『西域歷史語言研究集刊』一、科學出版社、二〇〇七、一三―四四頁〕）。

この文書はいくつかの斷片に分かれているが、榮氏によってA～E組にそれぞれ分類されている。榮氏はこのうちの「C組」文書の一―四一行目を西州都督府の牒文であるとし、四二―四三行目を先の牒文の抄目とみなした。さらに、四四―四九行目は西州都督府の典・康義によって作成された牒であるが、官印がないことから、控えか草稿と考えた。

しかし荒川氏は他のトルファン文書と比較した結果、榮氏の指摘に異議を唱え、一―四一行目までをⅠ文書と呼び西州都督府戶曹の「關式文書」であると指摘した。氏によれば、この關式文書とは「州府や都護府内の諸曹同士でやり取りされる文書でありながら、州府や都護府の官印が捺されるもの」という（本書五〇頁）。

また四二―四八行目までをⅡ文書とし、「固定的な機關（官司）に所屬しない典から西州都督府に宛てた『謹牒』式文書である」と指摘した（本書五四頁）。

この典について、荒川氏は、「唐代の典とはこれまで一般的に固定的な機關附きの書記として理解される部分が多い」と說明する一方、「『～使』の肩書きをもつ官に典が附き從うことが多かった」と指摘し、さらに氏はその例としてトルファン文書の中から使者とともに典が派遣されている例を擧げ、「典は單に文書

を作成するだけではなく、實際に發出先に出向いて文書を傳達もしくは發出先で文書を作成し提出するために」派遣されていたのだとする（本書五四頁）。

また荒川氏は、トルファン文書中には、典に任命されていたソグド人が多く登場することを指摘した（本書五八―五九頁の表を參照）。

さらに、氏は二〇〇四年にトルファン・バダムで發見されたソグド語官文書の存在より、ソグド人たちは羈縻州府においても官文書を作成する任務に就いていたが、羈縻州府が唐の支配を受けるようになった初期はソグド語で文書を作成、その後、漢文で文書を作成するようになったと指摘する。

トルファン文書に精通している荒川氏でなければ、このような文書書式にもとづいた精緻な檢討はできなかったであろう。

次に石見清裕氏「西安出土北周『史君墓誌』漢文部分譯注・考察」について述べる。

この史君墓誌は二〇〇三年に西安の北郊で發掘、發見されたものである。同時に發見された史君墓の石棺は非常に特徴的であり、上部には瓦をかたどった中國風の屋根があしらわれているのに、周圍に施された彫刻はゾロアスター教的要素などのソグド風の文化的意匠のモチーフが彫刻されていた。さらに、注目を集めたのは、石棺の正面の庇部分に掲げられた長方形の石板に、ソグド語文と漢文の二言語が刻まれていたことである。石見氏は新シルクロード科研による現地調査によってこれを實見し、漢文部分の錄文の確定を行い、さらに譯注と考察を行った。次に言及する吉田氏の論考では、ソグド語部分の篆刻は明らかにソグド語を知っている人間によってなされているという。その事情を勘案して、筆者は漢文の篆刻が稚拙でもあることから、おそらく漢字文化に精通していないソグド人によって篆刻されたと指摘し、さらに漢文の内容は中國の古典に依據した引用が多く見られることから、こちらは中國文化に精通しているものによって作文が爲されたと述べる（本書七八頁）。

また本墓誌で非常に重要なのは、ソグド語には「キッシュ國の姓で姑臧の在住（の者）がいた」、漢文には「史國の人である」と刻まれることである。このことより、文字史料において「キッシュ＝史國」「史姓＝キッシュ出身ソグド人」ということが初めて證明された。墓主の一族はおそらくキッシュより移住してきたソグド系の人物であったのだろう。さらに氏は、彼ら一族の移住時期が北魏末であることが漢文内容より明らかにされると指摘する。また、「薩保判事曹主」という地位に就いていたことも記される。「薩保」とはもともとソグド語のサルトパウというキャラバン隊長を意味する言葉であったが、漢字で「薩保」「薩寶」「薩甫」などと音寫され、隋以前ではソグド人集落の長を指し、唐以後にソグド人集落が州縣制に組み込まれると、ゾロアスター教と教徒の管理者を意味するようになるという。また「曹主」の曹は、地方官署の屬官として漢魏以來の名稱であったと筆者は指摘する（本書八七頁）。おそらく、薩寶府は「曹」にあたるいくつかの部署に分かれており、曹主はその長であると考えられるという。判事はその文字の意味から法曹・司法などを擔當すると考えられ、史君は薩寶府の司法に關わる曹の長であったと指摘される。これは、いまだ謎に包まれた薩寶府の制度を知る上でも非常に重要な

點である。

次に石見氏もとりあげた史君墓石板に刻まれたソグド語面の解讀に當たった吉田豊氏の「附論：西安出土北周『史君墓誌』ソグド語部分譯注」について述べる。

このソグド語部分は石板の右側半分以上を占めており、縦書きであったようである。ソグド語は當初横書きで書かれていたが、この石板が刻まれた六世紀の後半には縦書きが始まっていたことがわかる。また吉田氏によると、このソグド語部分は手慣れた書き手によって書かれた印象を與えるが、漢文の書き手と同一人物であったかどうか判斷する材料がないという。

本論は吉田氏による詳細なテキスト、讀みの注、翻譯、譯注が爲されており、ソグド語版と漢文版を比較することにより得られた、ソグド語の固有名詞の漢字音音寫例が掲げられているので、たいへん有益である。

また、この石板の漢文部分には「祖の阿史槃陀は本國の薩保たり」という一文が見える。石見氏はこの「本國」には「故國」と「この國」の兩義があると指摘し、この「本國」は「北魏」であり、「史君の祖父は北魏で薩保となった」と結論づける（本書八三頁）。しかし、吉田豊氏は、ソグド語面の當該箇所には「sγwδyk-stn」とあって、これを「ソグド本國」と解釋しており、史君の祖先の移住時期にはさらなる檢討が必要であろう。

山下將司氏「北朝時代後期における長安政權とソグド人――西安出土『北周・康業墓誌』の考察――」では、二〇〇四年に出土した康業墓誌を考察し、西魏時代における長安在住のソグド人の狀況と西魏・北周政權とソグド集團との關係について明らかにする。この墓誌は、北魏から西魏、北周にわたる康業の父と自身の事績が記される。

本論ではまず、山下氏による錄文・訓讀・語釋・口語譯が附されており、さらに康業親子の「大天主」就任について檢討されている。この「大天主」とは墓誌史料には一例「州天主」という例がみられるものの、編纂史料には全く現れない語である。ところが山下氏は、この「大天主」と「主」という字が共通する「祆主」との關連性に着目して論を進めた。祆主とは祆教（ゾロアスター教）の神殿を祀る職である。ソグド人は中國國內に移住し、聚落を作っていたことは周知の事實である。そして、ソグド人たちはそれぞれの集落に彼らが信仰していた祆教（ゾロアスター教）の神殿を築いていた。山下氏は、ゾロアスター教を意味する「祆」という文字は唐代初期に創出されたもので、それ以前は「胡天」「天神」などの語句でゾロアスター教を表していたという陳垣氏の先行研究を引用し（「火祆教入中國考」『國學季刊』一―一、北京大學、二七―四六頁、『陳垣學術論文集第一集』、中華書局、一九八〇に再錄、本書一二五―一二六頁）、「大天主」と「祆主」が關連すると述べる。

また墓誌の記載によれば、康業の父は二度にわたって大天主となり、康業自身は一度だけ大天主となっている。山下氏はいずれの大天主就任も皇帝による承認が必要であったことを指摘し、北朝の長安政權のソグド人聚落への管理・干渉が徹底していたと結論づけた。さらに、氏は、康業の父が「車騎大將軍・雍州呼藥であった翟門」や「西國胡の豪望」によって大天主に推擧された、という記述に注目する。

山下氏によれば翟姓はソグド人の姓であり、翟門の帯びていた「車騎大將軍」という身分は軍府の長官である可能性が高いことから、ソグド集團が翟門の下で軍府として統括されていたという。また「豪望」は單なる有力者ではなく、その下に附き従う人々を含めた「階層」を指すと述べる。

これらのことより、山下氏は當時の長安には相當規模のソグド人聚落があったことを指摘し、さらにその聚落の代表者が西魏政權下で官職を得ており、代表者を通じて西魏政權との交渉を行っていたと指摘する。

福島惠氏「『安元壽墓誌』（唐・光宅元年）譯注」では、太宗・李世民の陪葬墓であった安元壽の墓より發見された墓誌の譯注・考察が行われる。本墓誌も新シルクロード科研による實見調査により、錄文が作成されている。さらに語釋・現代語譯が加えられているが、本墓誌は非常に長文であるにもかかわらず、精緻な譯注がなされており、福島氏の根氣強さには脫帽せざるをえない。

本墓誌には元壽が武威の安氏の一族であることが記載されている。武威の安氏は當時名族としてよく知られ、それは安元壽の父・興貴とその弟・修仁が隋末に涼州一帶に勢力を保っていた李軌を打ち倒し、唐に歸屬したためである。このことから安氏は商人ではなく武人として活躍してきたことがわかると、福島氏は指摘する。さらに山下氏の論文を引用し、安元壽は夏州群牧使という牧場を管理する地位に就いているが、そのことから安元壽の生業は軍馬の生産であり、安氏一族は代々私的に營んできた「牧場主」であるとする（山下將司「唐の監牧制と中國在住ソグド人の牧場」『東洋史研究』六六―四、二〇〇七）。また福島氏は安修仁の家が洛陽の南市に近い惠和坊官舍であったこと、安元壽の妻翟氏が長安の西市に近い懷遠坊で死亡したことから、武威の安氏が涼州・洛陽・長安を結ぶ交易活動にも從事していたことを指摘し、安元壽の家業を、牧場業とそこで生産された馬を賣買する商業の雙方であったことを指摘した（本書一六六頁）。

これには評者も同意見である。評者も二〇〇五年の中央アジア學フォーラムでの發表で、安祿山が「群牧使」という地位に就いていることなどを例に擧げ、ソグド系のものが唐代の牧場を管理する重要な地位に就いていることをすでに指摘した。さらに論考において、後述するソグド人と突厥の混血集團である六胡州の居住民が牧業を營み、馬を大量に飼育し、賣買していたことなども言及した（中田裕子「唐代六胡州におけるソグド系突厥」『東洋史苑』七二、二〇〇九）。

森部豊氏「增補：7～8世紀の北アジア世界と安史の亂」は、『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歷史的展開』（關西大學出版部、二〇一〇、以下、森部二〇一〇）に掲載されたものに改訂を加えたものである。著者は、安史の亂の中核となる軍隊には多數の北アジア・東北アジア系諸族が多く含まれていたが、その中には、ソグド人、ソグド系武人も含まれていたことに着目する。なかでも、ソグド人と突厥の混血した集團が安史軍に存在していたことから、安史軍におけるソグド系突厥の重要性を指摘した。

森部氏は遊牧民化したソグド人、つまりソグド系の武人を「ソグド系武人」と呼び、さらに、ソグド人と突厥の混血集團を「ソグド系突厥」と呼んでいるが、森部氏はその主體を「あくまでソ

グド人」として述べる。

ここでこの名稱に關する説明と新たに評者の考える「ソグド系突厥」について、述べておきたい。

この「ソグド系突厥」とは、しばしば本書でも登場するが、この名稱は評者も二〇〇二年に提出した修士論文で使用した（「ソグド人の東方活動について ――特に安史の亂前後を中心に――」『龍谷大學大學院研究科紀要』第二四集、二〇〇二）。その後、森安氏の論考「ウイグルから見た安史の亂」（『內陸アジア言語の研究』一七、二〇〇二、以下、森安二〇〇二）でも引用されたが、森安氏は、「このような概念を齋藤・森部・中田が同時期に論じた」（森安二〇〇二、一一八頁）と述べる。齋藤勝氏の論考は未發表であるが、森部氏と評者の概念は活字化されている。さらに森部氏と評者の概念には、大きな差異があるので、以下に紹介する。

森部氏と評者はそれぞれ「ソグド系突厥」という名稱を用いて、ソグド人と遊牧民・突厥の混血集團を表現しているが、森部氏は本書や森部二〇一〇で、「突厥の血を引いたソグド人」としており、遊牧民化したソグド人をソグド系突厥とする。

それに對して、評者は當初からあくまで「突厥人」としてこの集團をとらえている。本書で森安氏が「後で言及する中田裕子との混亂を避けるためには、むしろ「突厥系ソグド人」ないしは「トルコ化ソグド人」「トルコ系ソグド人」と言った方がよかったかもしれない」（本書一九頁）と述べるのは、このためである。

では、ソグド系突厥が「突厥」であると主張することに、どのような意味があるのか。

それは遊牧民であるからこそ獲得できた「養馬」という技術である。中國國內に移住してきたソグド系突厥集團であると考えられる「六胡州」の住民は馬を養い育て賣買していたという。この養馬という技術は、やはり遊牧民であるからこそ、獲得できた技術ではないであろうか。

森部氏は二〇〇一年に發表された論考「後晉安萬金・何氏夫妻墓誌銘および何君政墓誌銘」（『內陸アジア言語の研究』一六、二〇〇一）において、遊牧化したソグド人を「ソグド系武人」と名付けている。この名稱こそ森部氏の考える「ソグド人と突厥の融合した」集團の性格を最も的確に表しているのではないだろうか。しかし、この概念を廣めた功績は森部氏によるところが非常に大きいのであり、評者も森部氏の「ソグド系突厥」の定義には贊同はできないが、敬意を拂いたい。

石見清裕氏「唐の內陸アジア系移住民對象規定とその變遷」では、石見氏が以前檢討した北アジア・中央アジアからの移住民對象規定を再度檢討する。とくに本論で中心となっているのは、石見氏が一九九五年に發表した「唐代の內附異民族對象規定をめぐって」（堀敏一先生古稀記念『中國古代の國家と民衆』、汲古書院、一九九五、のち石見清裕『唐の北方問題と國際秩序』、汲古書院、一九九八に再錄）のうちで取り擧げた『唐令拾遺』賦役令第六條、武德七年令、開元七年令に見える「賦役令・內府民族對象規定」である（本書內では史料3とされる）。

石見氏は舊稿において、この規定を（a）戶等規定、（b）銀錢徵稅規定、（c）附貫後三年目以降の羊徵稅規定、（d）羊のいない場所での折納、および從軍の代償の免除規定、（e）二世の

百姓化規定の項目に分類した。さらに、（b）から（c）の繋がりにおいて、なぜ附貫直後は銀錢で徴税されたのに、三年目以降は羊で徴税するのか理解困難と指摘し、（b）はソグド商人に対する規定、（c）は遊牧民に対する規定とした。しかし齊藤勝氏は「唐代内附異民族への賦役規定と邊境社會」（『史學雜誌』一一七―三、二〇〇八）で、この解釋に疑問を投げかけ、すべて同一對象に對して設けられた規定であり、その對象は遊牧民であったと述べる。

石見氏は再度この規定に關して論證を試みた結果、ソグド人の中には隋以前から「百姓」として登錄されたものも存在し、彼らには銀錢・輸羊規定の對象者としてとらえるべきではないこと（本書二一八頁）、都市部のソグド商人には銀錢による徴税を課し、遊牧系鞠檠州民については輸羊の規定に含まれることを證明した。また、石見氏はこのような唐における邊境經營の破綻が、安史の亂の原因に關わると述べる（本書二二五頁）。これは、非常に興味深い指摘であろう。

以上が、第1部：ソグド篇の内容である。

ここで、現在のソグド研究において評者の感じる注意點をかかげたい。

それはソグド人特有の姓であるとみなされてきた「康・安・何・米・史」などの姓をもつ西域出身のものを、全て「ソグド人」として判斷することである。これはソグド研究の常識となっており、もちろん評者もその手法を用いて、ソグド由來の人々を考察し分類してきた。

しかし近年發見された「鄭巖墓誌」では、祖先がソグド人でありながら、鄭巖自身がソグド人特有の姓を名乘っていないことが明らかにされた（趙振華、中田裕子譯「唐代小府監鄭巖とそのソグド人祖先」『内陸アジア言語の研究』二六、二〇一一）。この鄭巖は鄭という姓であるが、その碑文には祖父が上述した薩寶であったこと、祖先が槃陀というソグド語で讀み解ける名をもっていたことが記されており、彼はソグド人であったと考えられる。このような事象は一體何を意味するのか。

そもそも、二一世紀までの研究においては、ソグディアナに居住していた人々がそのまま東方へ移住し、中國にやってきた際に姓が必要となったので、出身國の漢字音を姓として名乘ったと考えられていた。つまり、「ソグド」という集團がそのまま中國へ移住してきた、とみなされていた。

しかし、森部氏・評者が提唱した「ソグド系突厥」という概念は、そこに「混血・融合」という新しい視點を加えた。彼らが東方へ進出し、中國内部に定着していく間には様々な異文化との接觸がみられ、諸地域に聚落を作っていく過程で、土着の人間と混血していくといったことは、非常に多くあったと考えられる。

そもそも「ソグド人」という「民族」は、本當に存在したのであろうか。おそらくソグディアナのオアシス都市に居住していた人々は同じ言語を話し、同じ文化を共有していたのであろう。しかし、「ソグド人」とひとくくりにしてしまえば、そのような純粋な血統を持つ人々が他の何者と全く混ざらず存在していたような錯覺を生み出す。つまり近代になって生み出された「民族」という概念をそのまま當時に投影して歴史を考えることに繋がるのではないであろうか。

この「ソグディアナ」という地域は古來、様々な種族によって統治されて様々な文化が融合してきた地域である。たとえば、『舊唐書』巻一九八、西戎傳康國條（中華書局版、五三一〇頁）には、隋代に康國の王が西突厥の葉護可汗の女を娶った後、西突厥に臣屬したと記される。これは、西突厥とソグディアナにおいて、支配者レベルでも混血が進んでいたことを示唆しているのではないか。

「ソグド人」という概念そのものがどのようなものであるのか、新たに見直す時期に來ているのではないか、と評者は痛切に感じている。

第2部：ウイグル篇

石附玲氏「唐前半期の農牧接壤地帯におけるウイグル民族――東ウイグル可汗國前史――」では、天寶三（七四四）載に成立した東ウイグル可汗國が成立する以前の歴史、すなわち「東ウイグル可汗國前史」を考察する。

石附氏は、その時代のウイグルをとりあつかった代表的な論考として、アンネマリー＝フォン＝ガバイン氏（A. von Gabain）“Die Frühgeschichte der Uiguren: 607–745”. *Nachrichten der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens* 72,（一九五二年）と羽田亨「唐代回鶻史の研究」『羽田博士史學論文集上巻歴史編』（東洋史研究會、一九五七）の二つをあげる。しかし石附氏によれば、ガバイン氏の論考は、漢籍史料の誤解等が多く見られること、根據としている研究も誤りの多いものであるため安心して依據できないものであるという。また、羽田氏の論考は兩唐書などの二次的な編纂史料を用いており、考察に限界があることを指摘する。そのような問題點を解決するため、本論は詔敕などの一次史料を用い再度漢文史料の檢討を進める。またタイトルにもなっている「農牧接壤地帯」の歴史的重要性など最新の研究をも勘案し、本論の主題である東ウイグル可汗國前史の考察を進める。

石附氏はまず、七世紀末八世紀初めに復興した突厥第二可汗國の勢力に押されたウイグルの分裂を考察し、その一派のうち、甘州・涼州へ南走したものを「河西南走部」とし、南下せず漠北に留まったものを「漠北殘留部」と名付けた。その後、開元四（七一六）年、拔曳固に默啜が殺害された際、ウイグルは、同羅・霫などとともに唐へと降った。彼らは、大武軍（山西省馬邑縣の北）に安置されたので、「河東南走部」と名付けられた。さらに河西南走部の動向を考察し、この河西南走部の伏帝匐が赤水軍使に任命されていた可能性、南走部と赤水軍の關係が深かったことに着目した。この「赤水軍」とは、當時の唐朝の河西節度使における最大規模の軍であり、この軍の中で河西南走部は軍事的に重要な地位にあったと石附氏は指摘する（本書二四四―二七七頁）。第三節では、河東南走部の動向を考察し、對突厥戰爭の主要な戰力として彼らが取り込まれたことを指摘した。このように、東ウイグル可汗國成立以前のウイグルをとりあげ、詔敕などの史料を精力的に用いて、その動向を明らかにした論考はこれまでに存在しなかったであろう。またこのウイグルが分裂後居住した河西地方・河東地方はともに農牧接壤地域にあたり、この地域に住む遊牧民を取り入れることで、この地域を自國化し、さらに防衛の任務に當たらせることにより國防の役割をも擔わせていたとの指摘

も興味深い。

田中峰人氏「甘州ウイグル政權の左右翼體制」では、これまでオアシス都市國家として位置づけられてきた甘州ウイグルを遊牧民として位置づける畫期的な論考である。

甘州ウイグルとは、八四〇年にモンゴル高原に存在した東ウイグル可汗國が四散したのち、彼らの後裔が甘州附近に建國した國家である。田中氏は甘州ウイグルにおける先行研究では、これまで主にその政權の中心地であった「張掖」というオアシス都市に着目して論じられてきたため、商業的役割のみがとりあげられてきたという。しかし、田中氏は、古來この甘州は多くの遊牧民が流入してきた場所であり、相當數の遊牧民を內包できた土地であると指摘する。確かに評者もこの地域を訪れたことがあるが、この地域には現在でも多くの草原を目にすることができる。

さらに田中氏は、これまであまり歷史研究で用いられなかったコータン語史料を用い、その中から遊牧民的要素を抽出した。特に氏が注目したその要素とは、テリス（左翼）、タルドゥシュ（右翼）とよばれる遊牧民特有の左右翼體制が甘州ウイグル政權でも繼續して存在したことである。また、氏は左翼・右翼の置かれた地は、イプキンターグ（焉支山）とカラターグ（合黎山）であると述べる。

このように、これまで商業的性格が強く論じられていた甘州ウイグルは、實は遊牧的要素を多く持つ國家であったことを指摘する。また、コータン語の史料には町の住人としてソグド人の名もあげられ、「ソグドからウイグルへ」という本書のタイトル通り、兩者の間に歷史や文化の流れがあった可能性をうかがわせる。

笠井幸代氏「古ウイグル語佛典奧書 ――その起源と發展――」は、古ウイグル語佛典の奧書に注目する。この奧書には、その佛典が誰によって、いつ、どのような目的で作成・翻譯もしくは使用されたのか、などの情報が記されており、ウイグルの佛教信仰の實像を傳える史料として、非常に重要であるという。

ウイグルは八四〇年にキルギスに攻擊され四散したのち、モンゴル高原から天山東部に移り住み、西ウイグル王國を樹立した。彼らはもともとマニ教を信仰していたが、この地に居住していたトカラ人・漢人の影響により、徐々に佛教を信仰するようになった。そして、ついに佛教は西ウイグル國の國教的地位を占めることとなるのである。この奧書はウイグルに佛教が流入し始めたのと同時に成立したのだと笠井氏は指摘する（本書、三二三頁）。

また笠井氏は、この奧書の書式の起源をさぐるべく、ソグド語・ウイグル語・漢語の奧書を比較した。ここで氏が着目したのは、奧書の功德の回向に關する部分である。回向とは「自らの治めた功德を他にも差し向け、自他共に悟りを得るために助けとすること」を指すという。古ウイグル語の奧書には、この功德の回向のなかでも、守護神への回向が存在するが、ソグド語・漢語文いずれにも守護神への回向は存在しないという。では、この守護神の回向の箇所はなぜ導入されたのであろうか。笠井氏は、ここで敦煌出土文獻中に見える願文と比較し、古ウイグル語奧書の回向の部分と見事に一致することを發見した。そして、西ウイグル王國における佛教成立には、敦煌の漢人佛教の影響が非常に大きいと結論づけた。我々は從來、ソグド人と遊牧民の關係が深かったことにより、遊牧民に對するソグドの影響力の大きさをすぐに

連想してしまいがちであるが、笠井氏の指摘によって、個々の事象に對して詳細な檢討が必要であることが證明されたのである。

最後を締めくくるのが編者森安孝夫氏執筆の論文「シルクロード東部出土古ウイグル手紙文書の書式」である。本論文で扱う古ウイグル手紙文書とは、主に九世紀～一四世紀に書かれたウイグル文字を用いて古代ウイグル語で書かれた手紙を指すという。

本論文はまず *Acta Asiatica* 94, 2008 に第5章まで英文で發表されたものを改訂し、「はじめに」、第1章～第6章までが『大阪大學大學院文學研究科紀要』第五一巻（二〇一一、一―三一頁、以下、森安二〇一一とする）に掲載された。その後編の第七章から第一二章、「おわりに」が本書に掲載されている論文である。前編の内容は紙幅の關係上、ここで詳しくは述べないが、古ウイグル手紙文書研究の歴史學的意義が前編「はじめに」で述べられているので、ここで紹介しておく。

森安氏は古ウイグル手紙文書などの古文書を研究する上で、書式研究が非常に重要であると指摘する。ここでいう書式とは、どのような項目がどういう順序で記載されるかという構造面が想起されようが、實際には慣用表現（あいさつなどの常套句・決まり文句）なども含まれ、これらは異言語・異民族の間での文化交流によって、比較的容易に傳播すると氏は述べる（森安二〇一一、二頁）。異民族が交流するうちに、それぞれの文化がそれぞれの文化に浸透し融合する、という現象を歴史學的に檢證することは、本書の大きな目的でもあり、先に述べた「ソグド系突厥」のような存在もそのような現象を具現化している一例といえよう。そのような歴史觀をもちながら文書研究が行われることは、これまで一元化して述べられてきた歴史觀を覆す上でも、非常に重要なことであろうと評者も實感する。

さて、本論は7章から12章、「おわりに」、で構成される。ここでは、前編から引き續いて、古ウイグル語手紙文書の定型句や慣用表現、挨拶文言などが分類される。

この詳細かつ綿密な分類は、長年古ウイグル語文書の研究に携わった森安氏にしかできない、非常に大きな功績であろう。世界に分散する古ウイグル語文書をできるかぎり網羅し、分類するには相當な年月が費やされたと考えられ、氏の研究における集大成であるといえる。

ただ、この分類は非常に細かく分けられており、「特徴を抽出し仕分ける」という點において、古ウイグル語を專門としない研究者にはいささか扱いづらいものとなっているかもしれない。

最後に第3部の「行動記錄篇」について簡單に言及しておく。この行動記錄は本書の大きな特徴であろう。

この科研の特色は、現地調査に赴き、景觀や植生を詳細に觀察することも目的の一つであり、我々はメンバーで分擔しながら、現地の植生や高度を移動車の中で記錄していった。その作業を通じて、史料を讀むだけでは得ることのできない、實際の地形の高低差などを肌で感じることができた。調査の後の史料讀解においても、リアリティーをもって讀み進めることができるようになったことを調査メンバーは實感している。

以上、本書は現地調査に基づき、さまざまな視點からソグド・ウイグル雙方の生み出す歴史・文化を再考したものである。現地調査で得た出土文書や石碑などの史料を多く用い、最新の研究成

果が集約されている。非常に學界へ寄與するところが大きいといえよう。

本書の出版をきっかけとし、ソグド・ウイグル研究の新たな進展が期待される。

二〇一一年一二月　東京　汲古書院
一六十六三一頁　一八〇〇〇圓